

1. 学習習慣と学力について

- ・「家庭での平日の勉強時間」と正答率には、小・中学生共に深い相関がある。昨年度も同様の傾向がある。
「家で計画を立てて勉強をしている」「家で宿題をしている」と正答率には、小・中学生共に深い相関がある。
「家で苦手な教科の勉強をしている」と正答率には、小・中学生共に相関しており、小学生ではかなり深い相関がある。
「家で学校の予習をしている」「家で学校の復習をしている」と正答率には、小・中学生共に深い相関があり、予習は小学生において、復習は中学生において、特に深く相関している。
家庭での宿題や予習、復習、苦手教科の勉強等に計画を立てて規則正しくとりくめることと学力の間には、非常につよい関係があることがわかる。
- ・国語、数学が「好き」「大切」「授業がよくわかる」「社会に出たときに役立つ」と思ったり考えたりしていることと正答率には、それぞれ小・中学生共に深い相関がある。
教科を好きで、理解がすすみ、意義や有用感をもつことと学力の間には大きな関係があることがわかる。
- ・「読書が好きである」と国語、数学の正答率とは、それぞれ、小・中学生共に相関があり、特に小学生では、深い相関がある。このことは、昨年度と同傾向である。
読書と学力の間には、大きな関係があることがわかる。

<指導上の留意事項>

- ① 教科を好きにさせることが学力向上の第一歩である。子どもの関心・意欲を引き出す授業の工夫が必要である。
- ② 知識や技能が定着し、「わかった」「できるようになった」という理解感、達成感を子どもがもてるような丁寧な指導が求められる。
- ③ 教科を学ぶ意義や意味、有用性についても、子どもが理解できるような授業づくりが必要である。
- ④ 家庭学習の習慣化に課題がある。
 - ・学校では、授業の内容と宿題の関係を吟味したうえで、適切な宿題を与えることについて、いっそうの工夫をはかる必要がある。
 - ・予習や復習の意味について、わかりやすく説明すると共に、予習や復習の意義が実感化できるような授業づくりについても工夫を加える必要がある。
 - ・苦手な教科についての勉強方法について丁寧に指導すると共に、家庭での克服方法を保護者と連携しながら共有化できるようにすることが必要である。
 - ・家庭における学習習慣の確立については、学級担任に一任することなく、学校をあげて、多くの機会、方法をとらえて、アプローチしていく必要がある。
 - ・発展的な課題・学習にとりくむことが望ましい子どもには、自学自習の発展のさせ方を知らせていくことも大切である。

2. 生活習慣と学力について

- ・「朝食を毎日食べていること」「学校への持ち物を前日か朝に確かめていること」と正答率との相関はかなり深い。昨年度も同様の結果が出ている。
生活の基本習慣が確立されていることと学力の関係が深いことがわかる。
- ・「ものごとを最後までやりとげうれしかったことがある」と正答率との相関が深い。昨年度も同様である。
粘り強く物事にとりくみ達成感を得た経験の有無と学力の関係が深いことがわかる。
- ・「自分にはよいところがあると思う」ことと正答率との相関が小学生では深く、中学生でもやや相関している。「人の役に立つ人間になりたいか」と正答率との相関が小・中学生共に深い。昨年度も同様である。
自己肯定感、自己有用感をもてることと学力の間に一定の関係があることがわかる。
- ・「学校のきまりを守っている」ことと正答率との相関が小・中学生共に深く、中学生ではかなり深い。「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」と正答率との相関が小・中学生共に深く、小学生ではかなり深い。
規範意識をもっていることと学力の間の関係が深いことがわかる。
- ・「携帯電話やメールをしている」こと(時間の長短)と正答率には相関が見られないが、携帯電話そのものを所持していない小・中学生の方が、所持している小・中学生よりも正答率が高い。
携帯電話の所持と学力の間に関係があることがわかる。
- ・「家の人と学校での出来事について話をしている」ことと正答率には小・中学生ともに相関が深く、小学生ではかなり深い。昨年度も同様である。
家庭での会話や対話と学力の間に関係があることがわかる。
- ・「新聞やニュースなどに興味がある」ことと正答率には小・中学生共に相関が深く、中学生ではかなり深い。
学校での勉強だけではなく、幅広く社会的事象の関心をもつことと学力には関係があることがわかる。

<指導上の留意事項>

- ① 規則正しい生活習慣を学校と家庭が連携を深める中で、はかっていくことが必要である。
- ② きまりや規範意識を日常から大切にできる子どもの育成をはかると共に、家庭や地域とも連携を深める必要がある。
- ③ 自己肯定感、有用感を育むと共に、物事に粘り強くとりくむことのできる我慢強さを学校、家庭の協力の中で育てていく必要がある。
- ④ 家庭では、学校の出来事や社会的事象についても、積極的に話題化してもらえよう協力体制を構築していくとともに、授業の中では、社会的事象にかかわる題材を多く取り上げ、学活や道徳等においては、家庭での対話や話しあいにつながるようなとりくみを行って育必要がある。

3. その他

- ・「解答時間が十分であったか」と正答率の間には、小学校の国語A、算数A、算数Bにおいて特に深い相関があり、中学校の国語A、数学Aにおいて相関がある。昨年度に比べると、相関度は低くなっている。
調査(テスト)の形式に慣れていないことが、まだ影響していることが考えられる。とりわけ小学校にあっては、評価にあたっての工夫を幅広くはかる必要がある。

